

イギリスの地理教育と歴史地理研究に対する雑感

藤岡謙二郎

私は一ケ年の海外出張の過半をイギリスで過した。その理由はもとよりイギリス文学に興味があったわけではなく、また地味な——よくイギリス人以外の外人の使用する悪い表現をすればコールド・カータスイ的な——イギリス式の紳士になりたいと思ったからでもない。何よりの目的は同じ島国であり、しかもユーラシア大陸の両翼に、対蹠的位置を占めて横たわるこの両国の歴史地理を比較してみたいということにあった。とりわけイギリスにおけるロマン・タウンの地理的研究は、出発前の二、三年わが国府の研究に従事していた自分にはことのほか、このことへの希望をわきたさせた。結果私のロンドン滞在の七ヶ月は、地形図も片手に、これらの古い起源を有する町々を歩き廻ること、また戦後から目下建設中のロンドン郊外のニュー・タウンを見学するといった脚の地理学に終ったように思う。これ以外にやったことといえば、ダービー(H. C. Darby)のいるロンドン大学の University College of Department of Geography に一室をもらい、同教授の日本流でいえば普通講義ともいえる Changes of English Landscape と歴史地理学演習の授業をきいたにすぎない。しかもそれも、日本よりも長い夏休み——この国では学年休み——を挟んでいたため正味は少なかつた。もっともその間、スコットランドをふくむ各地大学の地理学教室、

64
さらにアイルランドではタブリン大学を訪れ、ロンドンでは、ほかにスタンブ (L. D. Stamp) イースト (W. G. East) ウールドリッジ (S. W. Wooldridge) その他第四紀学のゾーナー (F. E. Zeuner) の各教授にもあつた。

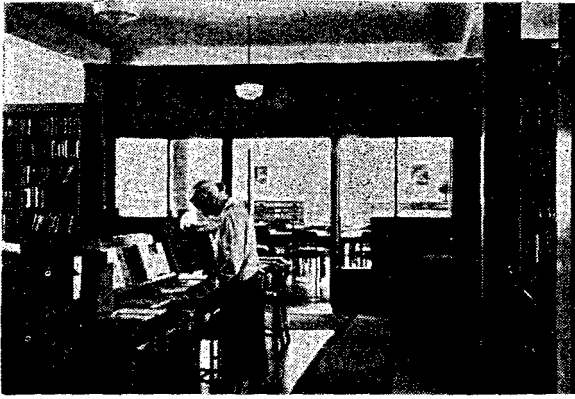
ができた。中学・高校における地理の授業も参観、また牧場や工業地域へのエクスカーションにも参加した。

イギリスといえは誰しもまた幾多の探検家と関係の深かった。王立地理学協会 (The Royal Geographical Society) を想い出すであらう。ハイドパークの南辺にあるその地味な建物の一階はマップルーム、二階は世界中の地理の書物や雑誌、それに探検に関する書物が集められている。しかもわれわれ会員でない者でも、署名さえすればこの書物を自由に読むことができる。私はもちろん、暫らく滞在していた大阪の村松教授も当時盛んにここを利用しておられた。

なおマップルームといえは、その大きなものは大英博物館の二階にあり、ここにもまた地籍図や古地図類が整備されている。二、三度トレーシングペーパーをもって写しに行つたが、ここではまずセルロイドのカバーを地図の上におき、正しい姿勢をとつて写さなければ係員から文句をいわれるのがおきまりである。

二

ダービー教授の演習には、歴史地理専攻の若い講師二人も学生と一緒に出席していた。教授は得意の各時代毎の時の断面 (individual cross-section) が互いに次の新しい時代へと引きつがれ、現在に到る様子つまり "Sequence of cross-section" を強調して、白らの編著である "An Historical Geography of England before 1800" を紹介し、もし歴史家が書けばかかる Prehistoric South Britain, Roman Britani 以下の十三章にわたるクロス



ケンブリッジの School of Geography における
ミッチェル女史

セクションは不要であることを説明した。その理由説明は、論理的ではなかったことと、ヒヤリングがむづかしかったこととで、一層不明瞭であったが、地理学のクロスセクションは必ずしも歴史家の試みる時代区分とは同じではなく、地理学者の場合は各時代毎の地域を考えねばならないと述べていたように思う。日本からきて間もない私は講義が終ってから、歴史時代の地域の復原を重んじるのであれば、では歴史時代の地域区分の重要性をどう考えられる

かと質問したが、私の英語が通じなかったのかもしれないが、へんな顔をしたので、またあなたのはドイツのハッシンガーの時の断面説と同じかときいたところ、ドイツではハッシンガーよりもクレッチマー (K. Kretchner) の区分の方がよく、いずれにせよ地域の各時代を通さねばいけないとして、肝心の地域区分のことにはふれなかった。その後私はケンブリッジ大学で講師のミッチェル女史 (J. B. Mitchell) に語る事ができた。ダービーよりも五・六年も年長の彼女は、やはりこの問題はむづかしく、自分は地域よりも集落や人口・工業等地理的事象について、これを過去から現在まで一貫さすと簡単にこたえ、要するに歴史地理学者は地理学者の中では一ばん、何んでも知らなければならぬから、苦労が多いと述べていた。その後またロンドン大学でドイツ人の講師ジニューバー博士 (Dr. K. A. Simhuber) が *Landschaft* の概念を説明した時、全部きき終ってから四回生の学生

が、わざわざランドシャフト等といった用語を使用しなくても Landscape でよいではないかと反対的な質問をしたのには驚かされた。あとで私はこの先史学出身のドイツ人の地理学者にきいたところ、学生の殆んどはドイツ語の書物を読んでいないこと、第二外国語としてはこの國の学生にはフランス語の方が幾分ましだということをかきされた。そうして最初いきなり、ハッシンガーのことなどダービーにたずねた非紳士的な自分の態度を、反省したことがあった。

イギリスの学者は理論の愛好家ではない。さしあたっての実証に支障を来たさない程度の理論をふりまくことは、むしろ、けいべつすべきことなかもしれない。それと彼等には教師といい学生といい大英帝國の頭が抜けない。つまり彼等の研究のフィールドはイギリス以外には考えられないからである。眼前に横わる問題にこそ興味があるのであって、例えば、われわれがほかによく日本で議論する地理学は文学部に属すべきか、理学部に属すべきか——げんにロンドン大学はじめ、この國では多くが文・理・経三学部に属し、学部本位の制度と異なる。ここではそんな大分類よりも Department of Geography そのものが大切なのである。——等には関心がないといつてよいのである。大学の普通講義にあたるべきものとして、ダービーがさきのイギリスの歴史地理をイギリス地誌をも兼ねながら、地理学専攻以外の学生にも講じているのは当然といえらるだろう。この場合彼はイギリスの散村を論じる場合、一寸ド・マシエオンのことにもふれる程度である。かかるイギリス中心の講義は、例えば都市地理学概論を講じていたスマイルス (A. E. Smiles) 教授においても同様であり、イースト (W. C. East) 教授の場合にのみその政治地理学の講義は、世界的な内容をもつ概説であるといえらるだろう——もっとも私はこれら二人の講義には二度出ただけであったが。——そうしてわれわれ日本人にはイーストといえらる Geography behind History (1938—) や An Histo-

rical Geography of Europe (1935—) で知られるごとく、彼を現在のイギリスの歴史地理学者のごとく考え易いのだが、当のイギリスでは彼を政治地理学者とみる向きが多く、ダービー等の行っている Domesday Book (土地調査簿) による特殊地域の地理、例えば彼編の “Domesday Geography of England” 等とかマッケンランドの開拓等といった如く、特定の時代の地理を復原考証するのが歴史地理学だと考えているようだ。

こうした着英間もない時の印象から、私はイギリスの地理学の祖といわれるマッキンダー (Sir H. J. Mackinder) のいまはクラシックになった “Britain and the British Seas” (1906) をみかえした。本書は一九三〇年に再版をみているが、ドマンジェオンのイギリス地誌の英訳版 (A. Demangeon. The British Isles 1939) マンステッド (J. E. Unstead) の “The British Isles” 1935 年初版、彼の死後彼の “A Systematic Regional Geography 叢書の一となる。その特色は自然地誌を主にした地域区分に重点がおかれている——とともにイギリス地誌に関する深さを示している。それはスタンブの数多いテキストブック——例えば “British Isles, —“Geography For To-Day 1939 初版、今日に到る。とは比較にはならない深さをもっているということが出来る。なかでもマッキンダーの書物は、イギリス地誌でありながら歴史地理の部に焦点があるといつてよく、これこそイギリスの人文地理一般に共通する考え方であり、とりわけ、ダービィヤイースト、さらにオックスフォードのフォーストン (J. M. Houston—A. Social Geography of Europe 1953. 註) 等の変化する景観の考え方の祖をなすものであり、むしろクロス・セクションの方の考え方は、ダービィィーによって深められ実証せられたものだろうと思うにいたった。それはともかくマッキンダーについてはここで多くを語る必要はない。その後半が学者としてよりも行政家として終ったことや、その歴史地理思想というもチェーレンの地理学に近いとする向きもあるが、もともと彼は自然地理にも造詣深く、こ

の方面にあつてはすぐれた気候学者のハーバートソン (A. J. Herbertson) を育成したことや、一八九九年にオックスフォード大学の School of Geography を創設し、また探検や旅行を主にしていた王立地理学協会での研究面を促進した功績は大きいといわねばならない。そのみでなく、"Ancient Town planning, 1913" や "Roman Britain, 1913" の著者として著名なハーヴェフィールド (F. Haverfield) 等をも育成してゐる。

自国を主とし Ethnographical Geography と称しては、言語や民族・地名の研究を、地理的位置や自然的基礎から考え、歴史地理学と称しては現代に到るまでの時代を追う景観の変遷をのべ、工業地理やメトロポリタン・イングランド、さらに大英帝国 (Imperial Britain) を考える仕組みこそ、彼のイギリス地誌であり、歴史地理であるように思われる。但しその結語のブリテン島それ自身が世界であるとする考え方、例えば "Geographical position has thus given to Britain a unique part in the world's drama," は、最初にのべたごとく、なおこの国の国民性となり、学門研究の態度にもあらわれているように思う、けれどもこれをわが志賀重昂の「日本風景論」と比較した時、或はハウスホフターの「太平洋地政学」とを比較した時、イギリス人の地道さと科学性とが見られるように思はれる。前述のごとくイギリスの考え方は、このうちでいくぶんはなやか動態的な面、ダービーのそれは地道にして静態的な面を示す、やはりイギリスの伝統ある歴史地理の流れの一面を示すものではないかと考えたことだった。

三

伝統と歴史を重んじるイギリスでは、いたるところに各種の遺跡や古文書・古図の類が保存され、各地の博物館のほか Record office があつて、また Ministry of Works はそれぞれの遺跡その他につぶての official Guide つまり

公のパンフレット類を発行している。その内容はもとより簡単な解説書にすぎないが、これを利用すれば歴史地理学の資料となることはいうまでもない。同様にわが建設省地理調査所にあたるべき Ordnance Survey —— 建物物はロンドンからはなれたサザンプトンにあるが —— では先史的代以後の歴史地図を発行している。たとえば中世、Dark age の monastic Britain に関しては政治的境界のほか、monks, canons Regular, Doubt Houses 等々の各種遺跡がドットマップで刻されている。ローマンブリテインに關しても同様であり、ローマン・ロードのほか都市趾のほか、Fort, Fortlet 等視模の大小まで示されているが、地形や機能別その他もう一步歴史地理の材料として利用するには、一々 one inch map で局部地域を検さねばならず、専門家にはやや不十分である。しかしいずれにせよ、このような歴史地図の製作を誂めたのは、私が着英一月前に逝去した技官のクラウフォード (O. G. S. Crauford) の業績である。ふるく小田内通敏の「郷土地理研究」に地理学的教養深き考古学者として彼の “Mad and his past,” (1921) が紹介されたが、ロンドンの書店で私は彼の自叙伝 “Said and Done,” (1955) が出ているのを発見した。むさぼるごとく読んだところ、彼がもとは、伝統あるオックスフォードの地理学を専攻し、ハーバートソンの教えを受けたことが書いてある。そして地理学と考古学とのグレンツゲビエについて悩み —— 例えば Was I goin to be a geographer or an Archacologist? —— 結局 my geographical training had taught me that the geographical environment exercised a strong influence upon human affairs both to-day and in historical times. … is must have been even more influential in prehistoic times. と考えた^たと書いてあった。大学機関になかった彼には正統な後継者がなく、又野人的性格からいろいろの批判はあるが、近年出たマーガリ (J. D. Margary) の “Roman Roads in Britain,” (Zvol. 1955) など、この種の研究を郷土史家にも植えつけた例というべきであろう。

ところがまた、書店で同様な性格をそなえたオックスフォードのアシュモレアン博物館に在るブラッドフォード (J. Bradford) の "Ancient Landscapes," (1957) なる書物が新刊として出され、そこには右のクラウフォード等が最初に試みた飛行機上からする原景観の研究を主にして、ひとりイギリスだけでなく、イタリアにおけるローマンゼンチュリゼーションまでが研究されていることを知った。——ほかに本書の第四章たる "The Changing Face of Europe: Classical and Medieval Town Plans" はオステアその他の廢墟都市が取扱われ、従来の都市の歴史地理研究に新しい資料を提供している。——これと、それ以前からその名のみを知っていたリーズ大学の経済史のリーダーをしていいるベレスフォード (M. W. Beresford) の "Medieval England—An Aerial Survey," 1958 がともにこのクラウフォード的な方法を応用しているのが注目される。前者が考古学であるならば後者は経済史的であるが、ことに後者の研究においては、われわれ歴史地理学徒が学ぶべき多くのものを有しているように思う。それは第二章の "Old Maps and new Photographs" にみられるごとく、古図と航空写真の両様からドムゼーブック等に出る村落や耕地その他の原景観を復原する方法であつて、イギリスの地理学者全般もまた、このベレスフォードによる科学的方法を推奨している。——本書の構成は "The Field and Villages," "The Towns," "Industrial and other Features" から成る。もとより飛行局技師である共著者の K. S. Joseph の現景観収録の努力が一層われわれ地理学徒の眼をチャームさせるのであるが——そこで私は何故かかる研究を地理学界でも行わないのかと、大学の若い地理学の講師にきいてみた。そうした場合ダービーのドウムデイ研究等にもなる経済統計の処理や、集落の内部構造等に関する研究は、やはり歴史地理学の別の部門である。幸い可視的な景観部門はこれらの学者がやっているからとのことであつた。このほかかかるベレスフォード的な研究は、ほかにやはり経済史家のホスキンス (W. G. Hoskin) 等によつても

試みられ、彼の編になる『The Making of the English Landscape』、叢書中最初に出版された同名書の中に歴史的景観と地質的な景色とは全く異なることを述べている。この叢書は彼のレスターシャー (Leicestershire) にはじまるいわば歴史地理的な地方史の研究と称すべきものである。

つまりイギリスでは一方に地方史の研究が盛んであり、それらが多く最初は考古学者により、近年では壮年の経済史家によって試みられ、この間にあって地理学者は不測不離な関係において、これらの研究を間接的に援助しているというべきであろうか。私はこれらイギリスにおける考古学や経済史と地理学との系譜的關係を究めんと努力したが、イギリス人には、このようなわれわれ日本人が興味をもつ問題はあまりに重要に思われないのであるか。他人のことは他人のこと、それを自分の領域に取り入れて、竹に木を継ぎたしたようなことはやりたくないともいうのであるか。ブラッドフォードについては、イギリスにおけるローマンセンチュリーションの地割の有無のこと、ベレスフォードについては、経済史と地理学との関係意見をきき正したが、前者からはやや或る返事が来たのみで、遂に後者の意見を徴することができなかった。イギリス人の物の考え方は、そのもの自体の中に発生する。したがって物自体への追究の結果、動物学研究が文学研究に代っても、それが学的良心に恥じる等といったことは考えないようである。銀行家のジョン、ラボックが人類自然史家・昆虫学者であるといったこと、学校行政家・船舶協会の相談役であったマッキンダーを近代地理学の祖として仰ぐといったことが不思議でも何でもないであり、したがって歴史地理学はこうあるべきだという学問の性格的批判びとは日本人のように敏感ではないことを知った。

それにもかかわらず歴史地理学は各大学の重要科目になっており、どの大学でも講義されている。ロンドンの私立中学のモデル・スクールにおける地理学の授業参観に行った時、案内してくれた地理科担当の女の先生に、その専攻はときくと歴史地理学だと答えた。彼女はエクスセターの大学出だという。またスタンブやブカナン (R. O. Buchanan)、それに近年教授になったワイゼ (J. C. T. Wise) 等のいるロンドンスクール・オブ・エコノミックスでもランベルト (A. M. Lambert) 女史が歴史地理を担当している。彼女はまたイーストの流れをくむし、私がローマロードの地図の話をしたら、ピカデリサーカス近くにある古代学会へ行くと教えてくれた。このほかグラスゴー大学では小雨ふる一日、先史及び古代地理専攻のフェアハスト (H. Fairhurst) 氏や同地理教室主任のミラー教授のドライブにより、一日グラスゴー郊外のアントニアン・ウォールの見学に説明せられたことを想い出す——因みにこの大学から昨年 "The Glasgow Region, (1958) なる書物が出た。さきのミラー (R. Miller) の編になるもので、グラスゴー周辺の共同調査の収録である。地理的概観について、地質気候から土地利用・歴史地理・都市域等すべてがふくまれる。ダービー等の研究があくまで個人であるのに対して、これはミラー教授を中心とする地理教室のオールメンバーを動員した点、主任の活動的な人間的性格と相俟って、推賞すべき科学的研究書というべきものである。

——この歴史地理とそれに自然地理との二科目とがどの大学にも開講されていることは、やはりマッキンダーの伝統といえたいえようか。その間において、ロンドン大学ではキングスカレッジで、ウールドリッジを主任とするためか自然地理の専門家が多く、一方気候学専攻のマントリー (G. Manley) が主任である Bedford College ではどうしてもかかる傾向が強いといえたいえようか。

なお私はロンドン大学にあって、しばしばゾナー教授が所長である Institute of Environmental Archaeology

をたずねた。地質学出身の先史学者であるが、その新装成った建物の各階に古生物学以下の研究室があり、日本でも戦後やかましくなった第四紀研究所の理想型とでもいうべきものであるが、ここでは大学院のみの授業を行い、各学科の出身者が集っている。

× × ×

日常生活態度においては格式や大英帝国の威厳を尊びながら、学問の分科・方法その他においては自由であるところ、イギリスの教育の特色があるように思われる。雑誌にあらわれたこの国の歴史地理の傾向その他については、また別の機会にふれたく、本文は筆者の単なる感想をつづつたものにすぎない。